

# 平成 23 年度作文コンクール

安全振興会では、生徒の皆さんの安全意識の高揚を図るために、「安全」又は「健康」をテーマに作文コンクールを実施しています。今年度も素晴らしい作品が984編も寄せられました。野村武選考委員長、山口健一副委員長、伊藤伸子、岩壁清吉、吉岡謙二郎、王尾富美子委員の6人の元校長先生に審査をお願いしました。最終選考会議では、最優秀2編、優秀6編、佳作35編が決定されました。この中から最優秀に選考された作品を掲載しました。

## 最優秀賞

### 心と心を繋ぐ輪・野菜を育てて

県立中央農業高等学校一年

三川 浩正

真夏の日差しが、容赦なく照りつける。気温は、連日30度を越える酷暑。でも、僕は驚くほど元気だ。それは多分、部活で育てた野菜達を、夏の間、たくさん食べているからだ。旬の野菜を収穫して家に持ち帰ると、ナスやキュウリ、トマト達は姿を変えて食卓に並び、旬の野菜には、人がその季節を健康に過ごすために必要なものが、たっぷり含まれているのだ。夏には夏の。冬には冬の。

僕は、幼い頃から好き嫌いがなく何でも食べる子供だった。特に、野菜を生で、もしくは茹でて、そのまま食べるのが好きだった。それは今も変わらない。そのうちに僕は、自分で野菜を育てたいという想いを抱くようになった。中学の頃、裏庭のプランターで、ミニトマトやピーマン、ナスを育てていた。毎日、水やりをしながら、実は赤く、緑濃く、紫色がツツツと光り出すのを心待ちにしていた。今は、想いを形にするために、先生方や先輩方から、野菜を育てるコツを日々教わっている。まだまだ駆け出しで無器用な僕は、一つの作業をこなすのに苦労し、体もシンドイ。でも、何故かいつも心は弾んでいる。夏休み、茄子を沢山持ち帰って、友達や知り合いの家に届けた。「皮が薄くてほんのり甘く、味のある茄子だね。」と丹精込めて作ったお茄子さんを食べたら疲れがとれて、元気が出たわ。「格別の味だよ。」などなど。多くの言葉を貰った。僕は、気持ちに言葉にするのが余り得意ではない。心の中に色々な思いの言葉は浮かんでいるのに、それを声に乗せることができないまま消えていつてしまっ。でも、心を込めて育てた野菜には、僕の言葉がいっぱい詰まっています。それに気づいてくれた人がいる。嬉しかった。本当に嬉しかった。収穫したての茄子をカゴに入れ自転車走らせた。黙ってツツツの大きな茄子を手渡した。手に取った人は、みな驚き、そして笑顔を返してくれた。僕も笑顔がこぼれた。言葉を越え伝わる何かが、そこに確かにあった。

野菜も植物も声を出さない。でも、様々な信号を送ってくれている。それを気に留めないで見逃してしまったり、健康には育たない。ヒトも同じではないだろうか。自分の発した信号をキャッチし、返してくれる繋がりが必要なのだ。そうでないと、心は病んでしまい、体もバランスを崩してしまう。季節の恵みを自分の手で生み出すことを通じて、僕は新しい繋がりを持った。自然から授かったエネルギーは、野菜達を、そして、僕を通して周りの人達に届き、循環し、ゆつくりと広がっていくのだ。「年をとったら、菜園を始めたいから、しっかりと勉強して師匠になつてね。」と叩かれた肩の重さが力に変わった。

この夏に芽生えた僕の元気の芽。枯れないように踏んばって、多くの知識を吸収し、秋には秋の味を届けよう。野菜の中に僕の言葉を精一杯込めて、心と心を繋ぐ輪をもっともって広げていこう。

## 最優秀賞

### 前を向いて歩いていくために

県立多摩高等学校一年

前之園 和喜

福島県会津地方に『什の掟』というものがある。「一、年長者の言うことに背いてはなりません。」から始まり七ヶ条まで心得があり、最後は有名な「ならぬことばならぬ物です。」で終わる、武家の子弟に訓示された教えである。僕は、幼い頃母からよくこの話を聞かされた覚えがある。

先日とてもシヨッキンガな出来事があった。電車に乗るとき、僕の後ろにおじさんが並んだ。いつもと違うことは、その人が白い杖をついていたということだ。その日はとても暑く、みんな早く冷房の効いた車内に入りたいたいという気持ちで、やがて電車が来て、列の後方は我先にと前の人を押しながら乗車した。その時、おじさんは後ろの人に肩をぶつけられ、列からはじかれてしまった。幸い人の壁ができていたので、転ぶことはなかったが、おじさんは自分が当たってしまった人に軽く会釈をし、何事もなかったように最後に乗車した。僕は胸が痛くなるほどシヨッキンガだった。何事もなかったようにということには慣れているということだろう。つまり、いつもいつも電車に乗る時は似たような危険な思いをしているということだ。みんな安全を守ってあげなければいけない人が、なぜ危険にさらされている？今も最後に乗ったせいでドアの前にいるのでつかまる場所がなく、ぶらぶらしている。僕は自分が為すべき事はわかっていた。一言「こちらどうぞ」と握り棒をつかまらせずあげればいいのか。でもそのたった一言が言えなかった。人前で見ず知らずの人に話しかけることが恥ずかしかったのだ。躊躇している間に下車駅に着いてしまった。僕は何もできないままだった。改札を通りながら「でも僕が言わなくても誰かが代わりに言ってくれたらどう」と心の中で言い訳をしていた。

その時、ふいに頭の中に『什の掟』が浮かんだ。「卑怯な振舞をしてはなりません。弱いものをいぢめてはなりません。」でも僕は恥ずかしくただただ。そんな言い訳を「ならぬことばならぬ物です。」が許してくれなかった。母は「これは真直ぐ前を見て生きていくための掟」と言っていた。現に僕は前を向いて歩いていた。自分の保身を第一に考えて、障がいのある人の安全を二の次にしてしまっ。そのことをとても後悔していたからだ。

高齢者や障がいのある人、赤ちゃんを抱えている人。みんなが安全に暮らせるような世の中になるよう、僕はこれからできることから努力していく。それが広まっていくにはどうしたらいいか、いろいろな場面を考えていく。まずは思い遣りの心を持つことだ。そうすれば恥ずかしくない強い心を保つことができる。僕はそう決意した。下を向いて歩くのではなく、真直ぐ前を見て歩いていくために。